

## 未来への扉、万博まであと2年 ～大阪・関西の魅力を世界へどう伝えるか～

### 【第3部：パネルディスカッション】

#### <パネリスト>

パナソニックホールディングス株式会社 参与/ジャズピアニスト 小川 理子  
政府代表/特命全権大使(関西担当) 姫野 勉

#### <コーディネーター>

株式会社新産業文化創出研究所 代表取締役所長(財団理事) 廣常 啓一

廣常 小川さん、姫野さん、ご講演有難うございました。今回は万博がテーマですが、お二人より幅広くお話をいただきました。小川さんからは、「サステナブル」「ウェルビーイング」という松下幸之助さんの話から「感性価値創造」「本業を通じて社会課題を解決する」というキーワードをいただき、本業を通じてということで、いわゆる CSV (Creating Shared Value：社会価値と経営価値を共有の価値として創造する)へ取り組まなければならないことを示唆いただいたと思います。特にZ世代、更にα世代の話も出ましたが、このような若者は社会課題を解決できない企業を敬遠するとのことでした。次世代 SDGs ネイティブの方々どう共創していくかが問われていると思います。姫野さんからも多岐に亘る話をいただき、特に万博を活かしてビジネスへどう繋げていくかを示唆いただきました。万博は実質的に既に始まっており、これをきっかけに新たなパートナーを見つけ、新たなビジネス機会を作るべきだと力説され、万博のレガシーはハード面を想像しますが、一種のソフトレガシーが加わる可能性を提示されました。また、国際ビジネスにおけるパートナー国はよく見極める必要があること、二国間関係だけではなく第三国に対しても関係を結んでいくべきとされ、オーストラリアと日本がパートナーシップを組み、東南アジア諸国へのビジネス共創の事例を示されました。お二方からいただいた提言内容から、ディスカッションを進めたいと思います。

その前に会場から講演への質問が届いていますので、まずこちらから回答いただきます。小川さんのソーラーランタンの話に対して、素晴らしいお話でしたが、このような

ものも今では中国製品に変わってしまっているのかというご質問です。小川さん、いかがでしょうか。

小川 はい。ご質問有難うございます。ご指摘の通り中国は凄いスピードでイノベーションを行い、様々なものを世の中に出しています。ソーラーランタンも中国製があり大変安く、大量の数をばら撒くパワーに日本は負けてしまうところがあります。私もアフリカのタンザニアで、ソーラーのソリューションを山岳サバンナ地域へ入れた時に、橋も病院もインフラ全部が中国の支援で造られ、子供たちへも中国語の教育をしているのを目の当たりにして、これは太刀打ちできないと思いました。しかし、精神誠意一緒になって課題を解決していく、人間関係を作り思いやりの心を持って接するところでは、日本は負けていないと考えています。この日本人特有の美德をこれからも大事にしながら継続できればと思っています。

廣常 まさに講演でお話いただいた「もの」の時代から「ノモ」に移るというところが、もしかすると日本の他国と異なる新たな社会貢献であり、場合によってはビジネスチャンスになるかもしれないですね。有難うございました。姫野さんへも同じ質問をさせていただきます。講演では中国との関係性は重要であると同時に、サプライチェーンの話も少しありました。途上国に関しての中国製品の席捲という事例と思いますが、こういう関係性を日本はこれからのどのような捉え方をすればいいのでしょうか。

姫野 受け取る側に立って考えると、何も無いよりあった方がいいとなります。取って代わられると言っても、そもそも灯りが無い人が大勢いる訳で、中国が支援を差し伸べることは悪いことではなく、日本が出来ることをすればいいのだと思います。アフリカ勤務時にも、似たような話が沢山ありました。先ほど小川さんが話されましたが、何しろ中国はスピードが早い。一方で日本の意思決定は遅い。先方の大臣が言うには、「溺れている人間には、いい梯子を持って来るから頑張れと言われるより、枝でいいから差し出してほしい」とのことです。これは日本の ODA の場合も同じで、スピードを上げて対応していますが、環境アセスメントや社会影響アセスメントがありますので、それをやらない中国の方がどうしても早い。道路にしても、日本が作った道路は本当に傷まないのですが、とにかく今年作って欲しいという話には応えられないことがあります。

そこは、棲み分けかなと思っています。これもアフリカでの経験ですが、中国の農業機械はすぐ壊れるが、日本の農業機械は良いけれども価格が高い。ODA においても日本の農機を提供しますが、継続購入が出来ないのでメーカーの方へ地元を理解してビジネス展開をするように話をしています。しかしクオリティを確保して継続できるようにすることはなかなか困難であり、日本の農協のような公的組織が農業機械を購入して貸し出すなど、他組織や仕組みとの連携・組み合わせによって、日本の良いものを必要とされる所に出来る限り早く届くようにしていました。

また、小川さんの指摘された心の部分はとても大切であり、「できれば日本とやりたいのだが・・・」という言葉は何度も聞いてきました。日本としては、よく使っていただけるものを提供する。価格については NPO を含めた公的な機関が各々の局面で関与し、協働して取り組んでいくことかと思っています。

廣常 大切だと話された心のことを考えると、提供する物の優劣ではなく、物によって地域課題が解決できたか、解決へ向けて伴奏できているか、結果を次に繋げていくことができるかが大事であり、お二人より実際にパートナーシップを組んで課題解決へ挑戦しているとお聞きして、日本

の強みはここにあって、これをどう広めていくかが課題だと思いました。逆に中国のスピードには、学ばなければならないということでした。従来までの社会貢献では良い悪いといった問題にはなりません、現在は社会の価値競争やビジネスにどう繋げていくかの時代で、今後この万博が、社会課題の解決をきっかけにしてどのようにビジネスを発展させていくかが問われのではないかと思います。

もう一つ、万博に関する質問が来ております。パビリオン、特に社員の共創へ参加するにはどうしたらいいかということです。万博への参加方法は、いくつか既に示されておりますが、お二人からまだ参加方法に悩んでおられる方へ、アドバイスをお願いできないでしょうか。

小川 チームエキスポ 2025 の活動が、まさしく開かれた共創活動となっています。個人でも、企業、市民団体、任意団体の方でも、社会課題を解決する事であれば自由にエントリーいただけます。エントリーすると、活動内容が多くの方々へ認知され、そこから新しいパートナーシップが生まれる可能性もあります。まずそこから気軽に、カジュアルに参加されてはと思います。

社員ということでは、パナソニックの場合は、子供たちと一緒に共創していく中で、社員の中にはいろいろな領域のスペシャリストが大勢いますので、子供たちが解決したい課題、描きたい未来を、その領域のスペシャリストが子供たちと一緒に考えて共創することを考えています。

姫野 社員の参加については分かりませんが、これからテーマウィークとしていろいろな行事が出てくる予定です。そこへ関わっていただければと思います。また、出展するパビリオンには、国や自治体、団体、民間企業など様々あり、そこで自分が貢献できるのかどうかを確認いただければと思います。そのことは、質問の趣旨とは外れますが、ビジネスチャンスに繋がる可能性もあります。

更に、日本に限定する必要もないと思います。外国のパビリオンで、何か手伝うことがないか、表に出る展示品に対してではなくても、機器やサービスで支えることは、地元の力が大いに必要とされると思います。国のみならず、

国連やASEAN事務局など10程度の国際機関もパビリオンを出しますので、そこの支援を検討いただくこともあるかと思えます。

別の観点から、先ほど万博の前・後という話をしましたが、場所に関しても万博の夢島に拘る必要はないと思えます。テーマウィークに合わせて関連企画を他の場所で開催するなど、良いタイミングを見つけて夢島だけに留まらずいろいろなチャレンジをしていただければと思えます。

廣常 私も、先週近畿経済産業局主催の万博イベントでチームエキスポのモデレーターを務めました。いろいろな思いを持った若い方々がプレゼンをされ、提案された方同士で新たに共創したいということも起きています。前後という話で言えば、既にいろいろな共創が始まっていることを実感しています。

それではここから、今までの話ではオフィシャルな立場でのご発言もあったと思えますが、もう少しお二人の思いやお考えに切り込んでいければと思えます。最初に、小川さんへ質問させていただきます。本業を通じて社会課題を解決するというので、これからいろいろなテーマを取り扱われると思えますが、特に力を入れているもの、ここに力を入れたいという思いなどございましたら、少しご紹介いただけますでしょうか。

小川 企業として一番分かりやすいテーマは、去年1月に発信したパナソニックグリーンインパクトかと思えます。先ほど姫野さんも話されたゼロエミッション、あらゆる場所や局面でCO2削減の貢献をしていく。例えば工場や商品における省エネ性能などを何十年も地道にやってきましたが、これからはお客さまが暮らしている生活や取引先にご利用いただくシステムを含めて、エネルギーの適切な使い方を求めなければならない。それらの全部を含めたエネルギーの最適化が地球規模の社会課題でもあり、企業としても一般生活者としても離れられないテーマになっていると思えます。

エネルギーというと、どうしても地球環境とか今の生活から距離があるように見えてしましますが、実は私たちが

生きるエネルギーと、地球が生きるエネルギーとは、先ほどワネルスの話もしましたが、全部つながっているわけです。例えば、私ども事業でサービスを使う際には、そのサービス提供会社へバリューチェーンの生産性を高めてエネルギーを減らしていただくとか、いま冷凍食品を安全に届けるコールドチェーン事業を展開していますが、そこでもCO2を削減しながら安全安心にお届けしています。それを受取ると私たちのエネルギーになり、そのエネルギーの循環そのものを考えながらグリーンインパクトをしていく。これが大きなテーマであり大きなメッセージであるかなと思えます。

廣常 姫野さんから、先ほどいろいろな国内パートナーシップを結べるのではないかという話でしたが、いま小川さんが話されたグリーンエネルギーの問題、もしくはパナソニックさんのような企業との共創、こういったものを推進していく制度、もしくは可能性などはありそうでしょうか。

姫野 それは既にいろいろな分野で沢山あると思えます。先ほど触れた内閣府の枠組みがありますし、それ以外にも各省庁や自治体が推進しているものもあります。それぞれの課題に対して、同じ志をもつ方々が活用されればと思えます。そこでは縦割りや主導権争いではなく、本当に大事だからやろうという方が増えて進んでいけば、世の中は良くなると思えます。

廣常 これまでは、パナソニックさんと協働したくてもハードルが高かったかもしれませんが、NGOともパートナーシップを結ばれているとのことで、この万博をきっかけに、行政支援も含めて国内パートナーシップが進んでいくことを期待したいと思います。有難うございました。姫野さんへもう一点質問させていただきますが、先ほど医療、エネルギー、食料、ゴミ問題、農村開発など様々な課題解決の話、高齢化問題として中国の事例も挙げていただきました。対象国としても、中国、ベトナム、インドネシア、インドの紹介がありました。それらへの取組みに際して、主体としては、企業が行なう場合もありますし、企業間の連

携、NGO や NPO、場合によっては行政機関自ら社会課題へ動くこともあるかと思えます。姫野さんから見て、万博をきっかけとして、どのようなパートナーシップが進むことが理想的とお考えでしょうか。

姫野 主体には拘りを持っていません。同じところを目指す熱い仲間が、所属を超えて一緒に取組む場を用意することが、行政の役割だと思っています。加えてお伝えしておきたいことは、ビジネスの色合いが強く出てもいいと思えます。ボランティアのような金儲けしないことが美しいと考える方がいるかもしれませんが、スタートアップとしてビジネスの価値があることを堂々と胸を張って取り組まればよいと思えます。それについても、行政としてしっかりサポートしたいと思えます。

少し話が脱線しますが、社会課題の中で健康の問題を考える場合、病気をどう治すかは重要ですが、病気にならないようにすることが大事だと思います。それが本人にとっても幸せなことであり、国の医療費負担も少なく済みます。元気でいることが経済活動や社会的活動を通じて世の中を良くするわけで、小川さんは天分を全うするという表現をされましたが、自分の持っているものを活かせるように、命が輝くようにという意味から「ヘルス」へ取り組んでいくことが素晴らしいことだと思います。

廣常 財団セミナーでも以前グローバルヘルスを取り上げました。先ほどの健康、特にユニバーサルヘルスカバレットという誰でも医療にアクセスできるような環境づくりという領域は、多分この万博のテーマであるいのち輝く、そこから日本の関連産業においては課題解決と同時に大きな市場進出になるのではと思ったところがございます。特に先ほどの話の延長で、医薬品や医療機器などのものだけではなく、それを活用した医療制度や健康予防医療などへも日本がこれから貢献できればいいかなと感じました。この件に関して、小川さんにも少しご意見をいただきたいと思えます。

小川 パナソニックでも、ビューティーやヘルスの事業を

展開しています。しかし厚生労働省のところで多くの時間とお金がかかってしまいますので、手軽に早くやりたいと考えても事業化できないことが多く、規制を見直す必要があると思っています。

先ほど姫野さんが未病のことを話されましたが、私どもも人生 100 年時代に向けてそのテーマへ取り組んでいます。例えば、調理家電や先ほどのコールドチェーン事業において、旬のものを美味しく栄養価高く調理できるようにソフトウェアとハードウェアの力を融合させて新しいビジネスにできないかとか、あるいは脳の認知の話で、実際耳には聞こえていないが感じる音があり、それが認知機能に効果的に働くのではないかなど、見えない価値のところへ技術の進化により見えてくるところもあり、未病の領域もどんどんビジネス化していける可能性があると思えます。

あと、姫野さんのボランティア活動は美しいけれども指摘された件、私ども企業も美しいだけではやっていけず、先ほど CSV の話もありましたが、社会価値と経済価値をどう両立させていくかということが、いま多くの日本企業が直面している課題ではないかと思えます。若い人たちは起業家的発想で本当にいろいろなアイデアを出しますし、新規事業のネタを上げてきます。しかしそれをビジネスとして持続可能にしていくかを考えた途端に、壁にぶつかってしまいます。この問題は万博を機会として、是非みんなで議論してそこを突破しなければ、日本も元気にならないと思えます。

廣常 有難うございます。この万博では完成したものやエビデンスが示されるものだけを提供するのではなく、お話しされたビジネスモデルが未整備でエビデンスも解明されていないものに対しても、この機会を通じてチャレンジすることも良案かもしれません。

折角ですので、その話題から上げたいと思えますが、企業においては社会貢献したいが持続的な経済価値に結び付けられないジレンマがある。最近では副業規程の下にボランティアは社外、社内は経済活動のみの動きもあり、ある意味個人にとってはこれも不幸なことで、会社の中でやりたいことで社会貢献しながらビジネス貢献できるよう

しなければならぬと思います。本日の未来の扉と、キーワードに一つの未来という話をいただきましたので、Z世代やα世代と言われる次世代の方々のために、この万博で我々が何をしないといけないのかという議論に移りたいと思います。次の世代のために、この万博における共創活動や、参加方法なども含めて、アイデアや提案をいただきたいと思います。小川さん、姫野さんの順でお願いします。

小川 共創をどのように実装していくか。今まさにそこを設計しているところです。社員、社外パートナー、α世代、Z世代が社会課題という共通のところを見ますが、かといって一人一人その課題も違う。例えば、食品アレルギーのない世界を作りたいというアイデアが出た時に、大学であればその専門領域を研究している人もいるし、企業であればその領域で開発している人もいます。そういう人たちが一緒に子供の子供の未来を考えていければいいのですが、企業側では、それを本業でやっている、本業でやっているが使えない、本業と距離があるが一緒に参画したい、面白いと思う人は副業で関わってほしいなど、いろいろなケースがあるだろうし、そういうことになれば人事も巻き込む必要もある。いろいろな意味で会社の働き方や関わり方、社員の関わり方を変えていく実験の第一歩かなと思います。これまでは組織に帰属する、組織のある事業領域に帰属することが通常概念でしたが、これからはこのアイデアを実現する、このプロジェクトを多くの仲間とやるということがあってもいいでしょうし、それを企業が応援することで社会全体が活性化するみたいなことは、私はやりたいと思っています。

廣常 この万博のテーマも、ある意味大きな社会実験であると言われておりますので、例えば1964年東京オリンピックでテレビが普及したようなハードレガシーと違って、今のような考え方や価値観がこの万博を通じてドラスティックに変化していくのも、ある意味そのための社会実験かもしれないですね。姫野さんは、いかがでしょうか。

姫野 どんな未来に自分が生きていきたいかを考えると、物質的な豊かさや便利さがあるかもしれませんが、やはり心穏やかに病気の心配をせず暮らせるとか、貧困の心配がないことが思い浮かぶと思います。いい世の中になって欲しいと未来を思う心が、いろいろな社会課題の解決に繋がると思います。

その未来には、我々や日本だけではなく、海外の方の未来もあると思います。その中で日本の事を知ってもらい、日本はいい国で日本に住みたい日本で仕事をしたいと思ってもらえるようにしたいと思います。いま日本は人口減少問題が大きな課題となっています。これに関して少子化対策がよく言われますが、海外からの人材をどうするかについて考えなければならぬと思います。特に高度人材については、スタートアップの方を含めて是非多く来て欲しいと思いますが、そういう人たちが日本へ行きたいと思ってもらえるようなことができればと思います。

もう一点、講演でお話しした着目すべき「何を」について、万博では大勢の海外の方がお越しになることを含めて、「観光」が重要な意味を持ってくることを付け加えさせていただきます。日本に来てとても良かった、また来たいと思っただき、更には日本に住み仕事をしようと思っただききっかけになればと思います。

廣常 重要なキーワードをいただきました。今までは日本が技術を持ち、ソリューション力があるので海外を含めて課題解決してきたかもしれません。今いただいたお話では、日本は人口減少し労働者も減るので、海外の方が日本の課題解決のためにコラボレーションや共創することが、未来のテーマになるかもしれないということです。今までは安い労働力の形で海外から来ていただきましたが、これからは日本のために起業してコミュニティビジネスやソーシャルビジネスへ参加され、場合によっては日本で起業した途上国の方が日本とランチを作ってネットワーク化することもこの万博をきっかけに生まれるというのは、姫野さんいかがでしょうか。

姫野 是非やりたいですね。皆さんやりましょう。

廣常 拍手がございました。有難うございます。

今までどちらかというと国際見本市の大規模バージョン的なものが万博として、日本の企業が持つ技術や、場合によっては物の展示で国の力を示していましたが、お互いの課題を解決し合う新たな万博のコンセプトが出来上がるといういなと思ったところがあります。一方的な議論になるといけませんので、小川さんと姫野さんの間で質問がございましたら、お願いできないでしょうか。小川さんいかがでしょうか。

小川 そうですね。今の日本の若い人たちはあまり海外へ出たがらないのですが、もっとオープンに海外へ出て活躍していただくには、企業としてどうすればいいでしょうか。

姫野 自由に羽ばたかれる方が大勢いても良いと思うのですが、なかなかそこまで出来ない時は、企業に在籍しながらいろいろな海外経験を、ある程度失敗しても帰ってきて企業が支えていただくと、一人ぼっちではないということでのいろいろな挑戦をしてみようという思いが出てくると思います。小川さんもそうされていると思いますが、そういうことを大いに応援していただければと思います。私の立場でも、そういう方へ何とか協力したいと思います。

廣常 有難うございます。姫野さんから逆に小川さんへご意見とかご質問はございませんでしょうか。

姫野 大阪の皆さんは、身を切る改革、規制改革を通じて日本を元気にしようと考えている方が多い所ですので、是非政府を突き上げていただきたいと思います。そういう力も加えて、大いに変えるべきところは変えていくことがよろしいのではないのでしょうか。

廣常 頼もしいお話をいただきました。私も 90 年花博の時に、海外から根付き球根を持って入れないことから、球根を輸入するためのルールを万博のために変更しました。実は植物防疫は二国間の国の招聘により結構ハードルが変わってくる場合があります。そのように万博には別の副

産物もあるかと思しますので、そのような話が皆さんから出てくるといいなと思いました。先ほどの課題解決のための規制緩和もありますが、未来の子供たちのために今ここでやっておかないといけないキーワードや、提言がございましたらご紹介いただきたいと思います。姫野さん、小川さんの順でお願いいたします。

姫野 少し切り口を変えて、無駄をなくす。これは省エネも関係しますが、開発途上国において語弊があるかもしれませんが、農作物が育ったけど収穫できずに腐ってしまう。収穫したけど運搬中に腐ってしまう。いわゆるフードロスですが、日本と全く次元の異なる問題になっています。あれもこれもやろうと機械やトラクターを駆使して作り、1年使い倒して壊れたら次の機械を下さいと言う状況です。もう少し足るを知ると言いますか、限りある地球の中で、より良い未来へ進むための発想を含めて、そこには日本の素晴らしい技術が多くありますので、それを活かす別の切り口から行動を起こせばいいのではないかと思います。

廣常 有難うございます。小川さんはいかがでしょう。

小川 私も全く違う観点で一言述べさせていただきます。実は私は歴史が大好きな歴女です。講演でトルコと日本の友好 120 周年の話をしました。トルコの人とはとても親日で、実際に話してみても、あの憎いロシアをやっつけてくれたと日露戦争のことを話されるのです。軍艦エルトゥールル号の話はトルコの人たちは誰でも知っているのに、私たち日本人は知らない人が多いのが実状です。大阪・関西は歴史に蓄積された素晴らしい風土を持っていますので、それを自分たちの誇り、宝物、アイデンティティとして世界に発信するようになればいいなと思っています。

廣常 有難うございます。音楽をされていらっしゃるのです、エルトゥールル号は日本に初めて軍学隊が披露された音楽つながりでも、日本の歴史に大きなインパクトがあったことかと思えます。時間が迫ってきましたので、最後の締めとしまして、今回サブタイトルに「大阪・関西の魅力を

世界にどう伝えるか」を掲げています。お二方から、視聴者の皆さまへ期待することを一言ずついただきたいと思っています。姫野さんからお願いできますでしょうか。

姫野 やはり大阪関西の大事業ですので、楽しくやっていますという事です。

廣常 有難うございます。では小川さんお願いします。

小川 関西というと、滋賀県の琵琶湖から京都、大阪と淀川を経て大阪湾、瀬戸内へ水でつながり、明るい方に向かってオープンに広がる風土です。そういうところへ是非来ていただいて、みんなでオープンに明るくつながりあって未来をデザインしましょうということを言いたいです。

廣常 有難うございます。お時間となりましたのでこれでパネルディスカッションを終わらせていただきます。小川さん、姫野さん、ご協力どうも有難うございました。

(終了)